

宋代の物流と商人

——軍糧納入への関わりを中心として——

西　　奥　　健　　志

緒　　言

宋朝の財政は、八〇%前後が軍事支出であつたという事実が示すように^①、軍事と極めて密接な関係にあつた。特に、西夏・遼の脅威に対抗するため辺境地帯に駐留させた軍隊に対する補給線の維持は財政上の大きな課題であつた。

課題克服のために宋朝が用いた手法は、「全国各地における特産品生産の進展と全国的市場の形成」という宋代経済の発展を背景としたものであつた。^② 日野開三郎氏は、「彼等（京師の米客商）は京師付近は無論のこと、東南所産の糧米をも集めてこれを北送し、駐辺軍の需要を充していた。へ（内は筆者による）」と述べ、江南地方の生産力と辺境の軍糧納入を開封の商人によつて結びつけた。斯波義信氏は、穀物の現地調達法である坐倉・寄糶等について言及するも、華北を「非自給地」とし、「宋代の補給体制と図」では江南から河北への物資移動を示す矢印を描いている。^③ 以上に対し、宮澤知之氏は、財政的物流という概念を提示した。国家が物流に介入（財政手段、専売制度、手形制度等）することによつて商人を動かし、江南から北辺に大量の軍事物資が移動し、それに伴つて軍事物資以外の商品が流通したと述べる。これまで、商業の発展・生産力の上昇という前提のもとで議論されてき

た辺餉問題について、財政的物流というあらたな視点（分析ツール）を提供した。しかし、客商を利用し、江南の物資を北辺・西北辺へ輸送・納入させるという点は従来の説を踏襲するものである。以上の見解は、今日に至るまで、辺餉問題を考える上の基本構造として定着してきたと言えよう。

開封の米客商が軍糧納入の中心であるとする日野氏の主張は、軍糧納入に携わる行商を開封の米行商とする理解による。氏は、『続資治通鑑長編』（以下『長編』と略記）巻六〇 景德二年五月辛亥の条の

其れ辺に粟を輸す者、尽くは行商に非ず、率ね其れ土人なり。既に交引を得て、特に衝要の州府に詣りて之を鬻ぐ。市得する者京師に至ること寡なし。京師に座賣舗を置き、名を權貨務に隸する有り、交引を懷にする者之に湊まる。若し行商ならば則ち舗賣為に保任し、京師權貨務に詣りて錢を給す。又た南州に移文して茶を給す。若し行商に非ざれば則ち舗賣自ら之を售い、茶賣に転鬻す。

という記事をあげて、「京師の公認坐賣として行を結成していた交引舗の保任を受け得た交引（約束手形）持参の行商はやはり京師の坐賣、さらに絞つていえば京師の米行商でなければならぬ。かくて沿辺輸粟の中心をなしていた客商はその主力が京師の米行商の客販活動にほかならぬものであったということになる。」と述べ、^⑦辺境の軍糧納入と京師の行商との密接な関係を主張する。行商が開封の米行をさすという指摘は、加藤繁氏も前掲の『長編』の記述をあげ「文中、行商とあるのは開封の米行人を指すのであろう」と日野氏と同様の見解を示している。^⑧これに対し、後藤久勝氏は、小野寺郁夫氏・宮澤氏の所説を受け、^⑨行商とは、開封の米行所属の商人ではなく、一路全体もしくはそれ以上にわたる地域を活動範囲とする客商のことをさし、^⑩入中商人の多数を占めるのは二つの州の間といったごく限られた地域を活動範囲とする地つきの商人である土人とする。^⑪

筆者は、先に東南諸路から西北辺境地域への輸送行為に注目し、開封から陝西各地への輸送費を分析した。その結果、通常時における遠距離の輸送をとまなう商業行為が困難であるため、軍糧納入が現地の商人を中心に行われ

た可能性を指摘した¹³。程民生氏は、河北・陝西の生産力について分析を行い、軍事物資の大部分は河北或いは陝西内でまかなわれたと指摘する¹⁴。また、江南から辺境への軍糧納入の前提となる「全国的市場」について、後藤氏は斯波氏が示す米穀の遠距離流通の例は「多くは一路内の州軍の間か、あるいは路境を挟んではいても比較的近接した州軍の間における移動を示したものであることを指摘した¹⁵。氏は続いて、『宋会要輯稿』（以下『宋会要』と略記）食貨一五〇一六 商稅雜錄 熙寧一〇年（一〇七七）の商稅統計（以下「商稅統計」と略記）を手がかりとし、宋代の行塩地区分（塩の販売指定区域）と重なる流通圏の存在を指摘する¹⁶。以上の見解は、「開封の客商」と「辺境の軍糧納入」との密接な関係に対して疑問を提示するものではあるが、現在のところ、これらの研究成果が宋代辺餉問題の解明に反映されているとは言い難い。

軍糧納入に関わる物流は、江南から華北全域を覆うもので、宋代を代表する遠距離流通と考えられてきたものであり、実情の解明は、物流の全体像を考える上でも非常に重要である。本稿では、開封と河北・陝西を結ぶ、軍糧納入に直接関わる物流に注目し、「客商を利用し、江南の物資を北辺・西北辺へ輸送・納入させる」という従来の説を検証する。

しかしながら、商人に関する記述は断片的なものが多く、彼らがどのように行動し、どの程度の規模であったのかを詳しく知ることができない。それでは、物流の状況を考察し、従来の説を検討するには、不十分である。そこで、本稿では、史料の不足を補うために「商稅統計」を用いる。商稅統計は客商の扱う商品を主な課税対象とするものであり、その額の多寡はある程度商品流通を反映しているものと思われる。加えて、「商稅統計」を地図上に落とし、交通路を分析することによって、これまでより詳しく物流の方向と大きさを知ることが可能となる。先学の業績をふまえつつ、商稅統計を分析の対象に加えることで、軍糧納入に携わる商人の実情にせまり、物流の全体像を描く手がかりとしたい。

なお、本稿では、路全体もしくはそれ以上にわたる地域を活動範囲とする商人を客商、二つの州の間といったごく限られた地域を活動範囲とする地つきの商人或いは現地の住民を土人と表記し、商人とは両者を含んだ商人全般を指す場合に使用するものとする。

一 宋代の商税制度

商税には過税と住税の二種類がある⁽¹⁸⁾。課税の対象は、客商の扱う商品であり、農民が販売する少数の商品に対して商税はかからない⁽¹⁹⁾。過税は通過税で、商人が貨物を持つて税務を通過するさい、一州について一度、原則として州治でその価格の二%が徴収されるが、州内で生産された商品には課税されない。住税は入市税の系列に入り、税額は三%である⁽²⁰⁾。

課税対象は、布帛・什器・香薬・宝貨・羊豚・莊田店宅・馬牛驢騾・茶塩等である⁽²¹⁾。一般の穀物については、災害時などを除き、課税されたと思われるが、軍糧も同様に課税されていたかどうかは特定できない。天禧元年（一〇一七）に陝西縁辺にたいして「陝西の縁辺穀を鬻ぐ者、算えること勿れ⁽²²⁾。」という詔が出されているが、前月（十一月）に陝西の災害を理由に布帛による税の代納を認めている⁽²³⁾。地域も限定されており、軍糧に対する課税免除と考えるより、一般の穀物に対する他の多くの例と同様、災害時の臨時的な措置と考えるのが妥当であろう。北宋の市糴（穀物の購入）に関する記述中には、「地理の遠近を度り、其の虚估を増して券を給し、茶を以て之を償う⁽²⁴⁾。」或いは「内地の諸州に三説法を行い、人を募りて入中せしめ、且つ、東南の塩を以てて京師の実銭に代えん⁽²⁵⁾」等とあるように、支払いに関する記述は散見するが、商税免除に言及するものは管見の限りでは見いだせない⁽²⁶⁾。また、漆俠氏は、延州を例にあげて、辺境に駐留する軍隊への軍糧調達と商税との密接な関係について指摘し、官⁽²⁷⁾

澤氏は「いうまでもなく商税は軍糧には課せられるが」と軍糧への課税について述べている。⁽²⁹⁾

辺境での穀物の買入れは、国家によって財政的に誘導されたものではあるが、応じるか否かは商人の自由意志であり、⁽³⁰⁾上供等の官が直接指導する輸送の際に商税が免除される場合とは事情が異なる。⁽³¹⁾商人の自由意志である入中に商税が課税されないとするのは不自然である。無論、臨時的に免除された可能性は否定できないが、税務全体を見渡したとき、米穀に対して課税を行わなかった税務を特定することは事実上不可能であるし、一般的な傾向として、通常の穀物と同様、軍糧にも課税していたとすることが妥当であると思われる。本稿では軍糧に対しても課税が行われていたとして、以下を叙述する。

一般的に商税額の多寡は、商品流通を反映していると考えられるが、後藤氏は『元豊九域志』の戸口統計を分析の対象に加えることによって、より詳細に流通の実態を示した。⁽³²⁾これは、単に商税額の多寡を比較する場合に比べ、商税統計と物流の関係を分析する上で、非常に有効である。氏は、この手法を用い、全国規模で流通圏の分析を行い、すでに河北や陝西が開封や江南地域とは異なる流通圏に属することを指摘している。⁽³⁴⁾しかし、後藤氏も指摘するように市場圏は商品によって異なるものであり、江南から開封を経て河北・陝西辺境へと軍糧が移動した場合、販売ルート上にあたる州軍は、行塩地区分に關係なく商税額が大きくなることが予想される。⁽³⁵⁾軍量納入に関わる物流については、後藤氏とは別に、地域ごとに分析する必要がある。

そこで、本稿では河北・陝西に地域を限定した上で、後藤氏にならって戸口と商税額の關係を示した図1と2を作成し、⁽³⁶⁾加えて物流のルートと方向を考察するため、交通路を書き入れ、各州の商税額を地図上に落とした図3と4を作成した。⁽³⁷⁾図1と2にみえる直線（回帰直線）は、戸数と商税額の標準的な關係を表したものである（以下、標準値と表記）。この直線より上にある州は戸数に対する商税額が平均より多く、下にある州は平均より少ないことになる。つまり、直線より上にある州は下に比べ活発な商業活動を想定できる。また、地図の州名の側

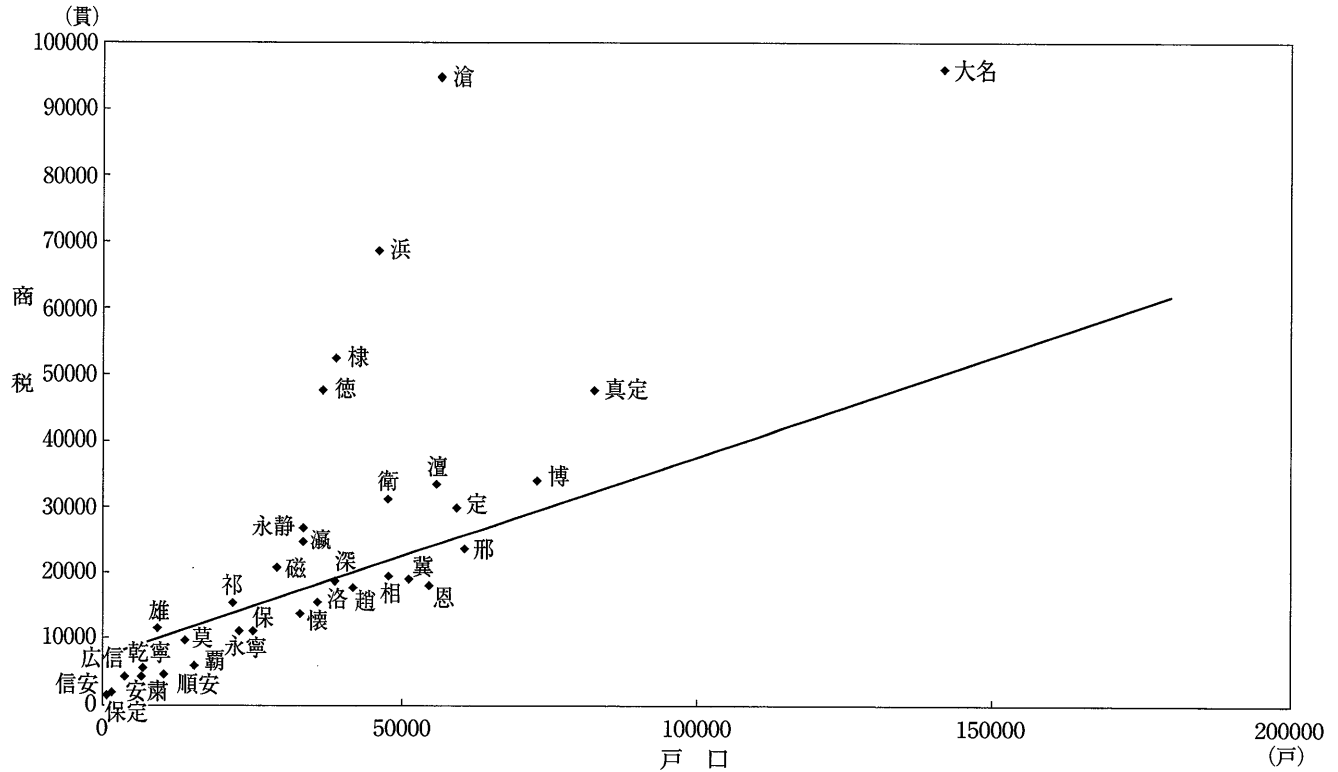


図1 河北の戸口と商税額

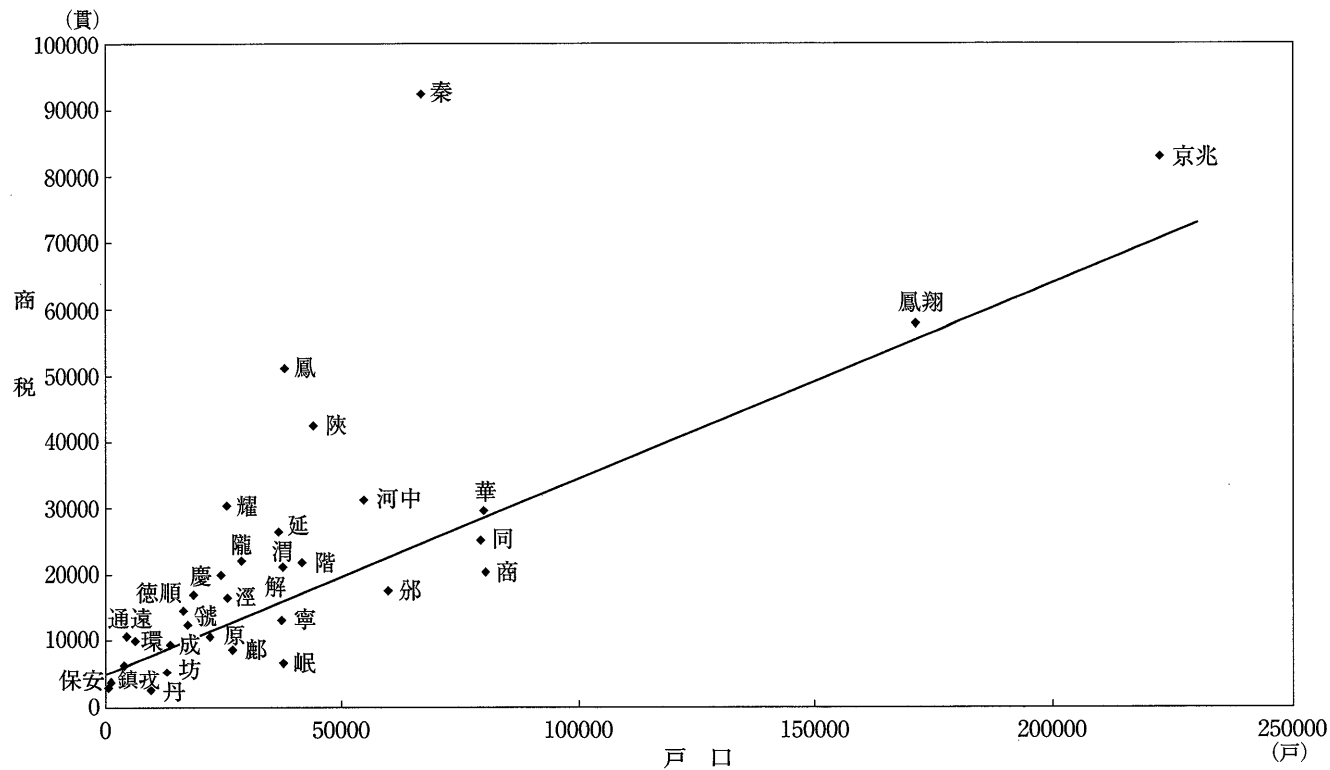


図2 陝西の戸口と商税額

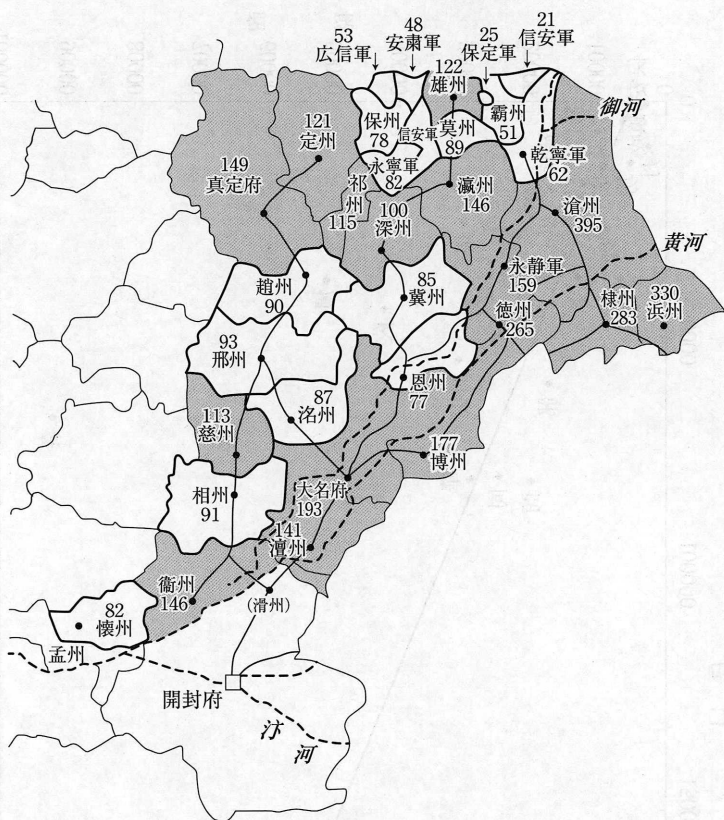


図3 河北の商税値

の数字（以下、商税値と表記）は、標準値と実際の商税額の値との関係を標準値と実際の値が同一の場合を一〇〇とし、地図上に示したものである（商税値が一〇〇を超える府州、つまり活発な商業活動を想定することができる府州には色をつけた）。

図1～4を用いることで、商業活動の活発な州とそうでない州が交通路に沿ってどのように分布しているかを把握し、加えて交通の要所にあたる州を詳細に分析することで、物流の方向と大きさを推測することができる。以上の図に、記述史料を加えることで、より詳細に河北・陝西における物流の状況を考察できると考える。なお、商税額の表示は、貫までとし、一

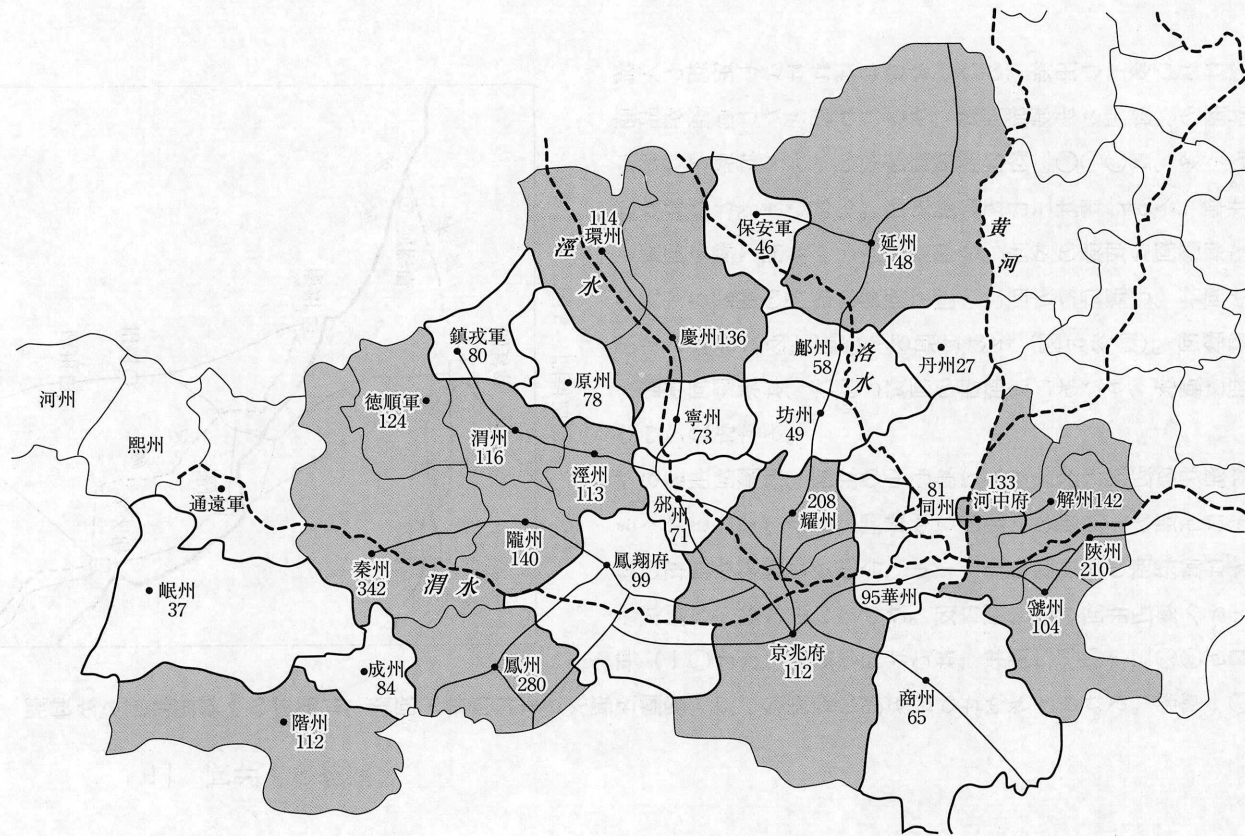


図4 陝西の商税値

賈未満の数値は切り捨てとする。

二 河北への物流

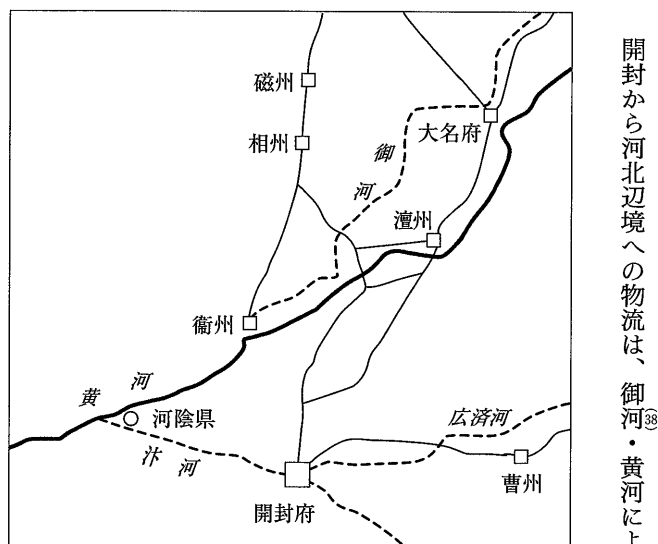


図5 開封周辺

開封から河北辺境への物流は、御河・黄河による水運と陸運、或いは両者の組み合わせが考えられる。熙寧一〇年（一〇七七）前後の河北では、年間二〇〇〜三〇〇万貫を軍糧の市糴に用いていた。^{②9} 仮に開封から河北辺境へと大量の軍糧が移動した場合、ルート上の諸州府の商税値は大きくなるはずである。開封から河北への運河上の要所にあたる孟州河陰県、河北の中心地である大名府周辺の状況について分析する。

孟州河陰県は、汴河と黄河の結節点にあたり、水運を利用する場合に必ず通過する県である（図5参照）。河陰県の属する孟州の州治は黄河を遡った西方に位置し、汴河から黄河を経て河北へと向かう場合、商税の徴収は河陰県で行われたと考えられる。商税額は五七三九貫である。華北における県城レベルの平均商税額は約二〇〇〇貫、多くの商品が通過したと思われるが、黄河流域から開封への商品流入も想定しなければならないため、突出して多いわけで

はない。⁽⁴¹⁾ また、汴河は黄河の水量の関係から、一〇月から三月初めは航行不能となる。⁽⁴²⁾ 年間を通しての輸送には不向きであり、大量の軍糧を汴河を利用して河北へと持ち込んだとは想定しにくい。

大名府は、河北における政治・経済の中心地であり、府内には黄河と御河の水運に加えて北部への陸路が通じている(図3参照)。商税値も高く(一九三)、活発な商業活動を想定することができるが、大名府の北に位置する諸州の商税値はいずれも標準値を下回り、御河や陸路に沿って北方辺境方面に大量の商品が移動した形跡はない。それでは、北部辺境地帯における軍糧の獲得は、どのように行われたのか。

『歐陽文忠公文集』卷一一七「乞置御河催綱」には、

臣伏して沿辺の鎮・定等十六州軍を見るに、毎年斛斗を入中せしめ、並びに在京一色の見錢を支す。自来止に全て沿辺入中に仰ぐのみならず、又近裏州軍に於いて斛斗を計置し、御河の漕運に従い辺に輸すは、軍儲不闕の所以なり。

とある。欧陽脩が河北転運按察使に就任した慶曆四年(一〇四四)には廃止されていたが、沿辺入中と同時に近裏州軍(大名府周辺)での穀物調達と御河による沿辺への漕運が行われていたことがわかる。包拯は豊作の際に近便の州(運河周辺?)で穀物の買い入れを行い、御河を利用して沿辺に漕運するよう主張し、⁽⁴³⁾ 薛向は澶・魏(大名府)の粟を市糴し、黄河と御河を利用して辺に給するよう主張する。⁽⁴⁴⁾ また、欧陽脩は、河北辺境で消費される物資について述べた中で、浜・滄・徳・博の四州をあげて、

辺上の州軍少闕に遇う毎に、即ち本司この四州より支撥せしめ、虚月有ること無し。⁽⁴⁵⁾

と述べている。黄河の下流域が辺境の補給政策にとって重要な役割をはたしていたことがわかる。同地域の物資は、『范文正公文集』卷一三「范公墓誌銘」に、

公德博の間の地を視るに、惟だ沃饒にして菽粟斂め易きのみならず、又河渠は塞下に通ず。大いに之を致すべ

し。乃ち諸州の緡錢を輦ぎ、就くに平糶を以ってし、方舟順流して、辺廩に集めしむ。

とあるように、黄河の下流域で購入し、御河を用いて辺境の城塞へと送られたと思われる。

以上のように、河北の補給政策に関する言及の中には、大名府周辺や黄河下流域等の生産力の高い地域で行う市糶と御河の漕運との連携について述べるものが多く、開封や江南方面からの軍糧運搬についての言及はない。また、上記の記述から、必ずしも河北南部・黄河下流域の物資を客商が直接辺境へと持ち込んでいたわけではなく、比較的生産力の高い地域で調達された物資が漕運によって辺境へと送られたことがわかる。実際、元豊七年（一〇八四）の河北の穀物備蓄量は、人糧・馬料を合わせて総額が一七六万石であったが、元豊二年（一〇七九）の時点で澶州・大名府に六七〇万石の備蓄があった。⁽⁴⁶⁾若干時間のずれがあるものの、六〇%の穀物が南部の二府州に備蓄されていたこととなり、軍糧納入に関わる客商の移動のすべてが北方辺境を終着点とするものでなかったことは明らかであろう。また、このことは、軍糧の半数が辺境以外の地で消費されていたという実状にも合致する。⁽⁴⁹⁾

史料中に現れる河北の物資集積地は、大名府（一九三）・澶州（二四二）・瀛州（一四六）・定州（二二二）・真定府（一四九）の五州府である。⁽⁵⁰⁾いずれの州も商税額は標準値を上回り、加えて、「大名府と澶州」、「瀛州」、「定州と真定府」の三つの地域を中心として周辺を標準値以下の州が取り囲む形でブロックを形成しているように見える。⁽⁵¹⁾

これは、黄河の下流域を除くと、河北に置かれた安撫使管轄下の四つの軍事路の内、大名府路（大名府、澶・懷・衛・徳・博・浜・棣州）、高陽関路（瀛・莫・雄・霸・恩・冀・滄州、永静・保定・乾寧・信安軍）、定州路（定・保・深・祁州、広信・安肅・順安・永寧軍）、真定府路（真定府、磁・相・邢・趙・洺州）に重なる部分が多い。⁽⁵²⁾

無論、宋朝中央からの資金（布帛や専売品を含む）⁽⁵³⁾援助や御河による大名府あるいは黄河下流域からのサポートを必要としたことは、疑いようはないが、河北には大名府と澶州（河北南部）、瀛州（河北東部）、定州と真定府（河北西北部）⁽⁵⁴⁾を中心とする三つの物資集積地が存在し、それぞれがその周辺地域から軍糧を調達していたのでは

ないだろうか。

三 陝西への物流

陝西において軍糧の代金として使用された解塩の年額は、熙寧一〇年（一〇七七）には二三〇万貫であつたから、その額に相当する軍事物資が陝西に持ち込まれたことになる。開封方面から軍糧を持ち込む場合、河南府から陝州を経由し、坊州・邠州を通じて西北辺境へといたるルートが中心となる。交通の要所にあたる陝州と坊州・邠州を通過する物流について順に検討する。

陝州は、陸運だけでなく、黄河の水運を利用する場合でも、開封方面からの物資流入のほぼ唯一のルートである。図4をみると陝州の商税値（二一〇）は大きく、活発な商業活動を想定できるが、陝州を経て陝西各地へと商品を運搬する際に通過する華州の商税額は陝州よりも少ない（陝州四二五〇九貫 華州二九四九貫）。加えて、華州の商税値は標準値より少なく（九五）、大きな商品の移動は想定できない。開封方面からの商品流入が陝州の商税増加の主要因とするには無理がある。当時、陝西から搬出される商品の中で商税に大きな影響を与えたのは、解州の解・安邑の兩県を産地とする解塩である。ここから搬出される塩の多くが黄河を渡り、陝州を通過し、行塩地各地へと持ち出された。⁵⁷ 開封・河南方面から陝西への物流は、陝州の商税額に大きな影響を与える量ではなく大量の軍糧が陝西へと流入した可能性は低い。

筆者は、以前『長編』卷三四四 元豊七年三月癸丑の

又竊に見るに關陝以西より沿辺諸路に至るまで、頗る東南の商賈有りて、内永興軍・鳳翔府数処の如きは尤も多し。

という記事をあげて、陝西にやってきた南商は、主に永興軍路・秦鳳路南部の比較的人口の多い地域で活動し、辺境部にまで出向くことは少なかったことを指摘した。⁽⁸⁸⁾ 陝西の中央に位置する坊州・邠州は、それぞれ前線の延州・保安軍、環・慶州、涇州・鎮戎軍への輸送ルート上にあたる（図4参照）。陝西辺境へ軍糧を運搬するためには必ず通過しなければならない州であり、南から北へと大量の軍糧が供給された場合、坊州と邠州の商税額は増加することが予想される。しかし、両州の商税額は低く（坊州四九 邠州七一）、先ほどの『長編』の記述を裏付けるもので、大量の軍糧が通過したとは考えにくい。

西夏と境界を接する辺境州軍の商税値は、異民族との交易が盛んな秦州を除くと、大量の軍糧が納入された地域であるにもかかわらず、延州・慶州・渭州等の辺境の要地が標準値をやや上回る程度で、周辺を標準値以下の州に取り囲まれている（図4参照）。これは、河北同様、陝西に置かれた安撫使管轄下の四つの軍事路の内、鄜延路（延・鄜・丹・坊州、保安軍）・環慶路（慶・環・邠・寧州）・涇原路（渭・涇・原州、鎮戎・德順軍）に相当する。⁽⁸⁹⁾

全体的に辺境州軍の商税額が少なく、周囲を標準値以下の州が囲んでいる状況は、延州・慶州・渭州を中心として、軍糧の調達が行われていたことを示しているのではないだろうか。関中だけでなく、涇原一帯・熙河等の地は、肥沃な土地が広がり生産力も高い。⁽⁹⁰⁾ 河北のように漕運の便があるわけではないが、辺境の諸州は、周辺諸州から布帛等の輕貨を中心とする税物や軍事物資の運搬によるサポートをうけていた。⁽⁹¹⁾ また、西北辺境一帯には、蕃部と通称された党項や吐蕃の小部族が散在していた。宋朝は彼らに對して、内属するものを熟戸、他を生戸と呼び、部族を単位として堡寨に付屬させ、堡寨を通じて彼らの部族を把握・支配していた。⁽⁹²⁾ 程氏によると、熙寧年間（一〇六八〜一〇七七）に収復した熙河地域（陝西西部の熙州・河州を中心とする地域）を加えた蕃部の総人口は二五〇万人に達するという。⁽⁹³⁾ 『元豊九域志』卷三によると、陝西の戸数は一三五万五八四戸である。一戸を五口で計算すると口数は六七七万九〇〇〇口、蕃部は陝西の総人口の二七%を占めていたことになる。彼らの中には宋朝から給

田を受ける者や田土を所有する者があり、辺境での和羅や博羅等（穀物の買い入れ）の対象にもなった。⁽⁶⁵⁾ 彼らが軍糧の調達に果たした役割も軽視すべきではないだろう。

大規模な戦闘が行われるような事態にならない限りは、河北と同様に延州・慶州・渭州等を中心として数州単位の物資調達圏が存在した可能性が高い。

四 河北・陝西の物流と商人・取引の関係

『宋史』卷一七五 和羅の条に、

河北又商人を募りて芻粟を辺に輸せしめ、要券を以て塩及び緡錢・香藥・宝貨を京師或いは東南州軍に取らしむ。陝西は則ち塩を両池に受く。之を入中と謂う。

と記されているように、軍糧の獲得に商人を利用したという点は疑いのような事実である。しかし、客商を利用し、江南の物資を北辺・西北辺へと輸送・納入させるといふ基本構造が成立する可能性の低いことは、これまでの考察から明らかであろう。それでは、客商はどのように軍糧納入とかわりあったのだろうか。

まず、商税統計の分析から得られた物流の状況の整理と、そこから想定できる商人像について考えてみよう。商税統計の分析からは、開封からダイレクトに北辺・西北辺とを結ぶような物流は想定できず、商税値が多い州を中心として、ほぼ軍事路に相当する数州単位の物資調達圏を構成していたことを確認した。以上の特徴から、軍糧を納入する商人の活動範囲は比較的限定され、後藤氏が主張するように土人との関係が強いことがわかる。少なくとも、大量の軍糧を所持しつつ、路をまたいで辺境へと移動する客商が数多く存在したとは想定できない。

ただ、この事によって開封等の他地域の客商が辺境での軍糧納入にかかわらなかったと主張しているわけではない。

い。「其輸辺粟者、非尽行商、率其土人。既得交引、特詣衝要州府鬻之、市得者寡至京師。」とあるように、軍糧納入の中心となった土人の多くは、地方都市で交引の類を売却している。一方で「以要券取塩及緡錢・香藥・宝貨於京師或東南州軍、陝西則受塩於兩池」とあるように、開封や解州に軍糧納入の代価として支払われた交引や塩鈔（塩の引換券）を持参する客商がいたのも事実である。問題は、土人と客商がいかに関わりあい、穀物や交引がどのように動いたのかという点にある。本章では、二・三章での考察をうけ、当時の客商・土人の関係及びその実状について、考察する。

辺境地域で商売を行う客商について、『長編』巻二二三 熙寧三年七月壬辰の条に、

緣辺に商販するも、廻貨無きを以つて、故に糧草を入中し、鑾・塩を算請す。

とある。回貨（持ち帰る商品）のない客商は、商品販売によって得た利益で糧草を入中し、鑾・塩を請求している⁽⁶⁶⁾。

『宋会要』食貨三六一八 權易 天聖四年三月六日の条、知渭州康繼英の言の一節には、

川中客旅は羅・帛・錦・綺を將到して秦州に赴き貨売す。其れ秦州は惟に商税を増添するのみならず、更に兼ねて入中して糧草を致す。

とある。四川の客商は、羅・帛・錦・綺を売却した後、その代金で糧草を入中した⁽⁶⁷⁾。回貨として塩鈔あるいは交子を入手することが目的であったと思われる。また、一般の客商についても、当時は都市からの銅錢の持ち出しが禁じられていたために、『宋史』卷一八〇 錢幣の条に、

旧小平錢は出門の禁有り。故に四方客旅の貨は、交易して錢を得ば、必ず大半は入れて末塩鈔に中て、告牒を収買す。而して余錢又た流布して市井に在り。此れ上下内外交りて相い養うなり。

とあるように、自らの商品を販売して錢を手に入れると、大半は入中して末塩鈔（東南地方産の塩の引き換え券）を手に入れるか、告牒⁽⁶⁸⁾を買っていた。

以上のように、客商と軍糧納入という行為は、必ずしも客商自身が遠距離を輸送し、辺境で納入するという形で直接結びつくものではなく、間に彼ら自身が持ち込んだ商品の売却という行動が存在する。ここでは商売で得た利益で糧草を入中し取引を入手するという客商像が浮かび上がる。⁽¹⁰⁾ この場合、商売するのは軍糧納入地以外の客商、入中するのは現地の穀物であつたと思われ、客商が他地域から穀物を持ち込んだわけではない。

熙河地域で軍糧を納入した客商の中に開封支払いの塩鈔を請求するものがあったことが指摘されているが、商品の売却後に回貨としての取引を入手することが目的であり、開封から軍糧を持ち込んだことを示すものではないだろう。当時四川と陝西の間を往復する客商の中には、陝西の塩を四川へと持ち込み四川の茶を陝西へと持ち帰り販売する者が多くいた。⁽¹¹⁾ 彼ら客商はいかにして陝西の塩を入手し得たのか。茶の販売で得た利益を利用して、地方都市で土人によって売りに出された塩鈔を買うか、自ら入中して塩鈔を入手するしかない。河北で商売を行う客商も、回貨としての商品が手に入らない場合、自ら入中するか、土人が売りに出したものを買取るかして取引を手に入れたのではないか。開封での現金支払いを基本とする便糶糧草取引は、開封で南貨（南方の産物）を仕入れて、河北・河東各地で販売するような客商にとつて、格好の回貨たりえたと思われる。「河北又募商人輸芻粟於辺、以要券取塩及緡錢・香藥・宝貨於京師或東南州軍、陝西則受塩於両池、謂之入中。」⁽¹²⁾ とは、「穀物の納入」から「取引の受け取り」という、一連の過程の最初と最後を述べたもので、中間部分が省略されたものであつたと言える。

軍糧は主として土人によって納入された。彼らが手に入れた取引・塩鈔は客商に売却される。客商は、自らの商品を売却した後、回貨としての取引等を入手するために現地の穀物を入中する。取引と客商が常に辺境と開封・解州を直接結ぶと考える必要もない。河北との取引によって京東へと入った取引が、開封との取引によって開封へと持ち込まれることや、四川・陝西間の取引の中で循環することも考えられる。取引・塩鈔は何度かの売買の後、開封・解州へと持ち込まれる。このような状況下では、手形を媒介として軍糧納入という目的は達成されるものの、

様々な地域を巡る「客商の移動」と軍糧納入地を中心とする「穀物の移動」と開封と辺境との間を基本とする「塩鈔・取引の移動」は直接対応しない場合が多くなる。それが、商税統計の分析と史料上の記述とのギャップとして表れたのではないだろうか。⁽⁷⁶⁾

国家による軍糧の調達という行為の中で、「手形」が土人と客商をつなぐ重要な役割を果たしたことを確認した。最後に、財政的・社会的な側面を考慮しつつ、軍糧調達における「手形」の位置づけについて私見を述べたい。

宋朝の財政収入は、増減はあるものの、両税穀物収入の総額が田土面積と戸口の増加にもかかわらず、長期にわたって増加しなかった。⁽⁷⁶⁾ 加えて、程氏が、国家が把握する田土面積が全体の半数に過ぎなかったことを指摘していることから明らかにように、宋朝には、両税では捉えきれない穀物が大量に存在した。

安史の乱（天宝一四年「七五五」→広徳元年「七六三」）以降の中国の社会的流動性の高まりは、以前のように国家が農民を充分に把握し、現物を無媒介で徴収することを困難にした。そのため、国家は社会との間にさまざまな「中間項」ないし「媒介項」（貨幣や折納・専売・和羅・和買・地主・大商人）を差し挟むことによつて物資を調達する手法を採用した。⁽⁷⁸⁾ 租税として捉えきれない部分が大量に存在することを前提とすれば、軍糧獲得にとつての一番の課題は、どこから軍糧を持つてくるかではなく、とらえきれない穀物をどのようにして出させるか、つまりどのような「媒介項」（財政手段）を挟むかである。

穀物と個々の客商・土人と取引の移動は重層的な構造を持ち、それぞれが独自の動きをする。「穀物納入に応じる者」「取引・塩鈔を受け取る者」「取引・塩鈔を購入する者」「取引・塩鈔を開封などに持参する者」がすべて同一人物である必然性はない。⁽⁷⁹⁾ 銅銭の持ち出しが禁止されている状況下では、軍糧納入に大量の銅銭を支払手段として用いても、土人の場合はともかく、他地域から来た客商の場合、辺境では有効に利用する手立てがない。仮に持ち出したとしても長距離の運搬には不便で、有効には機能しなかっただろう。「穀物」と「個々の客商・土人」、そ

れぞれの独自の動きに対して、軍糧納入という一定の方向性（多くの人々の関係を円滑にし、軍糧納入をスムーズに実行できるようにする潤滑油のようなもの）を与える媒介項が交引・塩鈔であつたのではないだろうか。無論、それらが有効に機能するには、宋代における商業の発達という背景が存在したことは言うまでもない。

結 語

宋代の物流と商人との関係を軍糧納入への関わりを中心に「商税統計」を利用して分析した。結果、客商が他地域から辺境各地へと軍糧を輸送し納入したとは考えにくく、軍事路に相当する数州単位の物資調達圏の存在を確認した。軍糧納入は、土人を中心として行われ、客商は自らの商品を売却した後、回貨あるいは持ち出し禁止の銅銭の代わりとして交引・塩鈔を利用するために現地の穀物を入中するか、土人が売りに出したそれらを購入した。一連の過程（軍糧の購入、納入から交引・塩鈔の受け取り・販売まで）は、塩鈔や交引を中心として、多くの商人が関わることによつてはじめて機能するものであつた。宋朝が農民から現物を徴収しようとする時、何らかの「媒介項」が必要であつた。時として有効に機能しない不完全なものではあつたが、交引や塩鈔は、多くの商人の関係をスムーズにする潤滑油としての役割をはたしたと考えられる。

ただ、河北と陝西がすべて同様であつたわけではない。河北と陝西では面積が異なり、前線の長さが河北に比べ陝西の方が長く、兵力が分散して配置されている上、地形的に分断されている。物資調達圏の面積は陝西の方が広くなるのは必然であろう。また、周知のとおり両地域では軍糧納入に利用された専売品・手形が異なる。宋代の物流を全国を覆う大きなシステムとして捉えた場合、河北・陝西との関係のみで完結するものではない。⁽⁸⁾今後、諸政策がどのように機能し、客商・土人がどのような関係にあつたのかについて、開封との関係、江南から開封への物

資の動きや商人の動きも考慮しつつ、議論を進める必要がある。

〔付記〕本稿は、二〇〇四年八月五日（七日の第三〇回宋代史研究会夏期合宿において報告した内容を加筆・修正したものである。宋代史研究会では、司会を務めていただいた青木敦先生をはじめ、諸先生方から、懇切なご指摘・コメントを頂いた。ここに記してお礼申し上げます。

註

- (1) 汪聖鐸『南宋財政史』（中華書局一九九五）七七―頁を参照。
- (2) 斯波義信『宋代商業史研究』（風間書房一九六八）・『宋代江南經濟史の研究』（汲古書院一九八八）・『北宋の社會經濟』（世界歴史大系・中国史）三 山川出版社一九九七）を参照。
- (3) 日野開三郎『宋代の便糶に就いて』（『東洋學報』二二・一一 一九三五）。後、『日野開三郎東洋史學論集』第一卷（三一書房 一九八八）所収の三七―頁を参照。
- (4) 斯波『宋代江南經濟史』二二―九頁を参照。
- (5) 自発的な商業流通に対する概念として用いられる言葉である。詳しくは、宮澤知之『宋代中国の國家と經濟』（創文社一九九八）第一部第一章を参照。
- (6) 宋代の行については、宮澤『國家と經濟』第一部第三章を参照。
- (7) 日野開三郎『北宋時代の塩鈔について 附・交引鋪』、『日野開三郎東洋史學論集』第六卷（三一書房 一九八三）一四七頁。
- (8) 加藤繁『唐宋時代の商人組合「行」を論じて清代の會館に及ぶ』（『史學』一四・一 一九三五）後、『支那經濟史考證』上卷（東洋文庫一九五二）所収の四四―頁。
- (9) 後藤久勝『北宋時代河北糧草交引の流通と京師交引鋪の保任について』（九州大學『東洋史論集』二六 一九九八）を参照。
- (10) 宮澤『國家と經濟』一四四―四五頁、小野寺郁夫『宋代における都市の商人組織「行」について』（『金沢大學法文學部論集哲學史學編』一三 一九六六）。
- (11) 商人に軍糧を納入させ、割り増して買い上げ、開封などで現金或いは茶塩等を支給することを言う。
- (12) 『長編』卷一〇〇 天聖三年正月壬午の条にも、然自西北宿兵既多、饋餉不足、因募商人入中芻粟、度地里遠近、增其虛估給券、以茶償之。…中略…。而入中者、非尽行商、多其土人。
- (13) 拙稿『北宋の西北辺における軍糧輸送と客商』（『鷹陵史學』二七 二〇〇一）を参照。

輸送の困難さによって、河北への漕運は一時期を除いて行われなかったこと、陝西へのそれはほとんど行われ

なかったことは、青山氏が指摘しているが、指摘は漕運（官による輸送）に対してであり、商人の輸送に対する詳しい言及はない。青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』（吉川弘文館 一九六三）三二九〜四三頁を参照。

- (14) 詳しくは、程民生『宋代地域経済』（河南大学出版社 一九九二）・『論宋代陝西路経済』（『中国歴史地理論叢』一九九四―）を参照。

- (15) 後藤久勝「北宋における京師と江淮地域との間の商業流通について」（九州大学『東洋史論集』二八 二〇〇〇）六一〜六三頁を参照。

- (16) 後藤久勝「北宋における商業流通の地域構造」（『史淵』一三九 二〇〇二）

- (17) 軍糧の納入を行うのは商人に限ったものではない。富農層だけでなく一般農民も積極的に軍糧納入に参加していた。拙稿「軍糧輸送と客商」四二頁を参照。

- (18) 本稿では、商税統計を過税・住税の熙寧一〇年（一〇七七）における徴税額を示したものとす。商税統計の性質、頭子錢・包角錢・力勝錢・契税と商税統計との関係については、後藤「商業流通の地域構造」七一〜七七頁を参照。ただし、米穀への課税について後藤氏は、原則的に免除されたとし、本稿の見解とは異なる。

- (19) 『宋会要』食貨一七・一三 商税雜錄 淳化五年五月。

- (20) 商税については、加藤繁『宋代商税考』（『史林』一九四 一九三四）後、『支那經濟史考證』下卷（東洋文庫 一九五三）所収、梅原郁「宋代商税制度補説」（『東洋史

研究』一八・四 一九六〇）、幸徹「北宋の過税制度」（『史淵』八三 一九六〇）を参照。

- (21) 『文獻通考』卷一四 征權考一 征商。

- (22) 一般の穀物については、見解が分かれている。加藤氏は、災害時など非常時に臨時に免除されたとし、梅原郁氏は、宋代を通じて法令上免税であったとする。しかしながら、梅原氏は「結果的に米穀からも商税を徴収することになっていたのではなからうか」と述べ、米穀に対する課税が行われていたことを認めている。斯波氏も、「すでに旧慣行によつて収税している税関では適用されず僅かに被災地において特典的に施行されるに止つたのである。」と述べている。加藤「宋代商税考」、梅原「宋代商税制度補説」、斯波「宋代商業史研究」五一〜一四頁を参照。

- (23) 『長編』卷九〇 天禧元年二月辛卯。

- (24) 『長編』卷九〇 天禧元年一月乙卯。

- (25) 『長編』卷一〇〇 天聖元年正月壬午。

- (26) 『長編』卷一二九 康定元年二月是歲の条。

- (27) 例えば、『宋会要』食貨三六・二五 權易 天聖七年二月の条には、

又八月勅。陝西沿辺州軍道路窄狹峻惡、即不同河北州軍水路地平易為般輦。令別定逐処入便糧草添饒錢數。…中略…。環州一処每十千支十二千六百。慶州一処每十千支十二千二百。延・渭州・保安・鎮戎軍四処每十千支十二千。鄜原・儀州三処每十千支十一千五百。涇州二処每十千支十一千。

とある。ここでも、道路の状況には言及するものの、内容の中心は、支払いに關してである。商税に關する言及はない。

- (28) 漆俠『宋代經濟史(下冊)』(上海人民出版社一九八八) 九四五～四六頁を参照。

- (29) 宮澤『國家と經濟』五一頁を参照。

- (30) 取引の値段が変化することによって、商人の入中が滞ったという事実は、『長編』卷一〇〇 天聖元年正月壬午・『長編』卷一七〇 皇祐三年正月己亥の条を参照、入中が官による強制ではなく、商人の自由意志であることを表している。また、この場合も問題となるのは取引の値段であつて、商税が問題とされることはない。

- (31) 綱運に携わる人々の私物に対する商税が免除されたことについては、青山『唐宋時代の交通』三九五～九八頁を参照。

- (32) 後藤氏は、戸口統計の性質(脱漏・詭名挟戸等)を理解した上で、『九域志』から得られた各州の戸数は、當時の実数を示しているとは考えられないが、その相対的な大小を知ろうとする際の指標とすることは可能である」と述べる。また、戸数と商税の關係については、一般の農民にとって生産物の販売や生活必需品の購入は、欠くべからざる行為であつたとし、統計上の戸数の大半を占める小農民の存在は、商品流通の多寡にとって意味を有していたとする。後藤「商業流通の地域構造」七一～七七頁参照。

- (33) 例えば、登州の商税値(登州五三)は、活発な商業活

動を示すものではなく、『經進東坡文集事略』卷三三「乞罷登萊榷塩狀」にも「地瘠民貧商賈不至」とある。また、秦州については、『宋会要』食貨三七・一四 市易熙寧五年三月二六日の条に「王韶言、沿辺州郡、惟秦鳳一路与西蕃諸国連接、蕃中物貨、四流而歸於我者、歲不知幾百千万、而商旅之利盡歸民間。」とあり、鄆州・青州については、『忠肅集』卷二「謝青州到任表」に「東方大国、莫如鄆青」とある。いずれの州も商税額の値は標準値を大きく上回る(秦州三四二 青州一九五 鄆州一九六)。戸口統計と商税統計によって示された数値が、現実から大きく乖離していることはなかつたのではないだろうか。

- (34) 後藤「商業流通の地域構造」図4を参照。

- (35) 長江の下流域から河北・陝西の辺境へと物資を輸送する場合、両浙塩・淮南塩・解塩東塩の行塩地を抜けて、河北・陝西へと至ることとなる。

- (36) 図1・2の作成にあたっては、後藤「商業流通の地域構造」七七～八一頁の手法になつた。なお、対象地域各州の商税務の詳細については、清水場東「北宋の商業活動」(中国書店 二〇〇五)を参照。

- (37) 図3・5の作成にあたっては以下の文献を参照した。譚其驤主編『中国歴史地圖集』宋・遼・金時期(地圖出版社 一九八二)・嚴耕望(一六)のみ嚴耕望遺著・李啓文整理『唐代交通圖考』二一[四][五][六](中央研究院歷史語言研究所 一九八五・八六・二〇〇三)・楊正泰『明代駅站考』(上海古籍出版社 一九九四)・陝

西省交通史志編写委員会編『陝西古代道路交通史』（人民交通出版社 一九八九）・楊捷編『山東公路史』第一冊（人民交通出版社 一九八九）・青山『唐宋時代の交通』第二 宋代の陸路、及び北宋時代主要交通路図。

- (38) 御河は、衛州共城県から通利・乾寧軍に至って界河に流れ込む運河で、辺境への軍糧運搬に利用された。

- (39) 日野「宋代の便羅」三七六―八二頁を参照。

- (40) 洛陽の西、河陰県から黄河の水を取り入れ、開封府から亳州・宿州（河南省東北部、安徽省北部）を抜けて、泗州で淮水に合流する運河。

- (41) 華北とは、河北・河東・陝西・京東・京西の五路を指す。南方の県の平均は約三七〇〇貫、兩折は平均で五〇〇〇貫を超える。詳しくは、斯波義信「宋代の都市化を考える」（『東方学』一〇二・二〇〇一）を参照。

- (42) 青山定雄「北宋の漕運法に就いて」（『市村博士古稀記念東洋史論叢』富山房 一九三三）を参照。

- (43) 『包孝肅奏議集』卷一〇「請添河北入中糧草」。

- (44) 『長編』卷一八一 至和二年十一月丁巳。

- (45) 『歐陽文忠公文集』卷一一七「再乞不放兩地供輸入色役」。

- (46) 黄河下流域だけでなく、河北西部の邢州・洺州、南部の懷州・衛州には肥沃な土地が広がり生産力も高い。程『宋代地域經濟』二〇〇・二二・二四四―二四六頁参照。

- (47) 『長編』卷三三三 元豐七年二月庚午。

- (48) 『長編』卷二九六 元豐二年正月癸酉。

- (49) 慶曆中（一〇四一―四八）の河北糧料の總消費量推定

値は四五〇万四四〇〇石。時期は多少ずれるが嘉祐元年（一〇五六）の辺境一一州軍の糧料消費量は一七三万石である。辺境での消費量は全体の四割に満たない。詳しくは、拙稿「北宋辺境の軍糧支出」（『鷹陵史学』二八二〇〇二）七六―八三頁を参照。

- (50) 『長編』卷一三五 慶曆二年二月乙未、『長編』卷二六〇 熙寧八年二月己卯、『長編』卷二七〇 熙寧八年一月庚午、『長編』卷二九六 元豐二年正月癸酉、『長編』卷三一 元豐四年三月戊戌の註、『長編』卷三四三 元豐七年二月庚午の各条を参照。

- (51) 瀛州周辺諸州のうち、浜州・瀛州は、産塩地を含むため（塩山県 三七四三八貫・無棣県 一七二八〇貫等）、商税値の大きさを単純に商業活動の活発さを示すものと断定することはできない。また、棣州との境に近い淄州鄒平県趙殿口鎮（二八三八九貫）、德州との境の齊州臨邑県（六二五一貫）等は、京東と河北を結ぶ交通路上にあたり、兩地域の活発な交流を反映していると思われる。これらの地域から河北北辺への輸送には、御河を用いたと考えられるが、御河流域（乾寧軍を占領した南皮県）の商税額が少なく、兩地域を直接結ぶ商品の移動は想定しにくい。各州の商税の詳細については、清水場『北宋の商業活動』を参照。

- (52) 宋代の安撫使と安撫使管轄下の路については、李昌憲『宋代安撫使考』（齊魯書社 一九九七）卷一 大名府路・高陽関路・定州路・真定府路の各項、渡辺久「北宋の経略安撫使」（『東洋史研究』五七・四 一九九九）を

参照。

(53) 『長編』卷二六三 熙寧八年閏四月庚戌。

(54) 定州周辺の諸州軍は、人口希薄な辺境地域ではない。他の辺境の諸州軍の戸数が一万戸に満たない場合が多いのに比して、定州周辺の諸州の戸数は、定州五万九二六〇戸・真定府八万二六〇七戸・祁州二万一九九二戸・永寧軍二万二六三九戸・保州二万四八七三戸である（『元豊九域志』卷二）。

(55) 『宋会要』食貨二四一五 熙寧一〇年四月二三日

(56) 現在の山西省西南、解州地方の塩を解塩という。当時の解塩の行塩地は、陝西の全域、京西南北全域、開封府・徐・袁・鄆州を除く京東西路全域、河東路の晋・絳・慈・隰四州、河北の懷・澶州に及ぶ。詳しくは、戴裔煊『宋代鈔塩制度研究』（中華書局一九八一）七五〜七六頁を参照。

(57) 三門に至るまでのルートは、『長編』卷七四・大中祥符三年八月乙亥に開封から河中府へのルートを述べて、自京師往河中府有二路。一由陝州浮梁歷白徑嶺、一由三停渡渡河。

とある。陝州で黄河を渡り、白徑嶺（山西省解県の東南一五里）を超え、解州を経て河中府へ向うルートを示している。このルートを逆に通って三門鎮に塩を運び、開封方面へと船運したと考えられる。清代河東の塩政の記録である『勅修河東塩法志』卷四 運程の条には、解塩の行塩地各地への行程が記されている。それによると、宋代の京西南路にあたる南陽までのルートは、解州を出

て、茅津渡（陝州の東北）で黄河を渡り、陝州、河南府を経由して南陽へと至る。河南府より南の地域は、おおむねこのルートをとった。陝州の州城より東に商稅務が存在せず、塩の運搬に関する商稅の徴収は陝州州城において行われたと考える。

(58) 拙稿「軍糧輸送と客商」四一頁参照。

(59) 李『宋代安撫使考』卷二 鄆延路・環慶路・涇原路の各項を参照。

(60) 程『宋代陝西』・『宋代地域經濟』二二〜二五頁を参照。

(61) 税は支移という形で辺境地域へと運び込まれた。また、四川から陝西へは、元豐四年（一〇八二）から五年（一〇八三）にかけて、金銀物帛八一万一七八〇匹両・錢三四六万二〇〇〇余貫が輸送された（『長編』卷三三一元豐五年一二月戊辰）。詳しくは、青山『唐宋時代の交通』三二九〜三四三頁参照。

(62) 宋代の蕃部については、金成奎『宋代の西北問題と異民族政策』（汲古書院二〇〇〇）第五章を参照。

(63) 程『論宋代陝西路經濟』一三四〜三五頁を参照。

(64) 金『宋代の西北問題』一六八〜七五頁を参照。

(65) 『長編』卷二五七 熙寧七年一〇月己丑、『宋会要』職官四三・五三 都大茶馬司 元豐四年七月九日の各条を参照。

(66) 『龍川略志』卷八 議罷陝西鑄錢欲以內藏絲紬等折充漕司にも、

由此陝西幣輕物重、商販沿辺者回、無以為貨、非換

塩鈔、則負銅錢以出。

とあり、基本的には、回貨として塩鈔を用いていたようである。

(67) 拙稿「軍糧輸送と客商」四三頁を参照。

(68) 銅錢出門の禁については、宮澤『国家と経済』七七～七八頁参照。

(69) 官告度牒のこと。官告は官員の告身(官吏の辞令書)、度牒は僧免許書、空命度牒で、共に一種の有価証券である。

(70) 塩鈔等の取引の類に対して商税を課税したかは定かではないが、江南・四川等からの軍糧の搬入はありえないとしても、取引は陝西・河北内を移動したはずである。であれば、取引を所持し通過する開封周辺の諸州、塩鈔を所持した商人が解州へと向かう途中で通過する河中府・曹州・澶州等の商税値は、標準を大きく上回るものではない。塩鈔等の取引の類には、商税がかけられていなかったのではないだろうか。

(71) 『長編』卷二四八 熙寧六年二月癸未。

(72) 『浄徳集』卷三「奏為繳連先知彭州日三次論奏權買川茶不便并條述今來利害事狀」、『宋会要』食貨三〇一三茶法雜録 熙寧九年四月二二日の条を参照。

(73) 便糴糧草取引については、日野「宋代の便糴」を参照。

(74) 河北の市糴に代価として使用された紬絹についての「今、勘会するに紬・絹は、本より河北・京東商人の須むる所に非ず(『長編』卷三〇五 元豐三年六月癸卯)」

という国家財政を司る三司の言及は、河北の入中に京東商人が関わっていたことを示している。

(75) 市場の重層性、及び上層市場と下層市場の非対称性に関する議論は、黒田明伸『貨幣システムの世界史』(岩波書店二〇〇三)を参照。黒田氏の考察は、貨幣を中心としたものであるが、さまざまな分析概念は、中国の市場を考察する上で非常に有用であると考ええる。

(76) これを明清と同じく「原額主義」とするかについては、上供米には付加税部分が組み込まれていること、県レベルでは秋苗額の固定化が見られないことが指摘されており、議論が分かれている。詳しい議論については、宮澤知之「中国専制国家財政の展開」(岩波講座『世界歴史』九 岩波書店一九九九・長井千秋「中華帝国の財政」(松田孝一編『東アジア経済史の諸問題』阿吽社二〇〇〇)を参照。本稿では、議論の是非は置き、両税法下の秋苗の実徴額が一八〇〇万〜二〇〇〇万石で長期にわたって停滞していたという事実のみを指摘しておく。実徴額については、袁一堂「唐宋時期和糴制度興起的背景及原因研究」(『人文雑誌』一九九四一)参照。

(77) 程「論宋代陝西路經濟」一三七〜三八頁を参照。

(78) 詳しい議論は、丸橋充拓「唐宋変革」史の近況から(『中国史学』一一二〇〇二)を参照。

(79) 明代の糧草の納入に関わった商人は、糧草を納入して倉鈔を受け取る「辺商(土着の商人)」、辺商のもたらす塩引を買い受けて塩を受領する「内商」、内商から塩を購入して行塩地に販売する「水商」の三種類に分類され

た。寺田隆信『山西商人の研究』（京都大学文学部内東洋史研究会 一九七二）二〇二頁参照。

(80) 河北の面積は一一万九千九百九十九km²、陝西は二五万七千七百七十七km²である。斯波『宋代江南経済史の研究』一五一頁を参照。

(81) 物流の全体像構築を目指す上で、宮澤氏の示した財政的物流という視点は、それまで個別事例として扱われてきた研究成果を取り込み、個々の政策（財政手段、専売制度、手形制度等）を包括し考察する上で、一定の方向性を与える非常に有効な視点であると考ええる。